

適切な医療を受ける際、「何処に住んでいるか」は重要なことだ。最先端の治療にこだわっても、住んでいる地域の医療が遅れていけば、退院後のケアが出来ない。住んでいる地域でアフターフォローが出来る事が一番大切である。

膀胱摘出手術の方法は①代用膀胱(症例数は0)、②回腸導管(年に1〜2例)、

がんから学ぶ

—がんサロン主宰者が語る—



1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの副フジキン総務部部长兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガリアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

公園の催し “心のリハビリ”に

③尿管皮膚瘻(最近はあまりしない)の3つ。

最終的に選んだのは、②。レベルを下げた手術のツケは患者が背負うこととなった。その差は驚くほど。医療格差のツケを患者が背負う。こんな思いが後の「がんサロン」の展開の礎となった。

8月16日、膀胱全摘手術を受ける。オペ時間6時間位。2日目、ベッドから立ち上がる。3日目、ロビーまで散歩。歩けなくなるのが怖かった。5日目、突然の腹痛と下痢。これまでの入院でこんな思いをしたことがない。

精神的に不安定なのが自分で分かる。テーブルにあった食器をひっくり返したりもした。後で分かった事だがヨーグルトが原因での腹痛だった。心のケアを受ける。看護学生(院生)が1週間ほど付き切りになってくれた。これは助かった。いつの間にか、爪切り、ペティナイフ等、刃ものの類を回収されていた。よく気がつくナースが居るな。心のケアが「最

大の課題」であることを、身をもって痛感する。

1週間ほどたったある日。体調が良くなり、近くの大坂城公園へ散歩に行った。朝6時ごろ。早朝から人が多い。その人たちがぞろぞろと天守閣のほうを登ってゆく。ついつられてあとを追った。天守閣の前の広場で練り広げられていたのは様々な行事だった。ラジオ体操、盆踊り、気功、紙芝居、歌謡曲、阪神タイガースの応援歌等。各コーナーをボランテイアが主導していた。

主催している方に会って聞いてみた。毎日は大変だが「待っていてくれる方々が居るので休めない」と。「でも楽しい」といっていた。知らない方々が挨拶したり話をしたりしながら朝の素敵な空気を吸っている。集まった数は1000人以上。抗がん剤よりも良く効くのではないかと思われた。それからは度々行った。歩いて片道25分程度かかるが、「心のリハビリテーション」になった。